科学と詩作（四）

——判断の源泉へ——

中島　聰*・栗栖照雄**

*岡山理科大学教養部

**岡山理科大学非常勤講師

（1990年9月30日　受理）

I

ここで我々は，ハイデガーの指し示す道の一つを辿って，「詩作」の領域に入って行くことにしよう。その道は，ハイデガーが人間の「思考」を二つに分けて規定する地点に始まる。周知の如く，ハイデガーは「思考（Denken）」を「計算的な（rechnennd）」思考と「省察的な（besinnlich）」思考とに分ける。この区別づけはハイデガーの思想にとって最も重要なものの一つである。何故なら，この区別づけは，あの存在と存在するものの「二重性」をそのものとして思考する「次元」を浮き上がらせるものだからである。この「次元」においてのみ，「詩作」は「思考」に対してその本質を開示する。

……

「計算的思考」は，古代ギリシア以来西洋の形而上学の動向を支配し，その成果を規定し続けてきたものとしてハイデガーは捉える。そのことを最も顕著に表示している言葉が，ラテン語の《ratio》であるとされる。西洋形而上学の展開は，一面でratioの支配権確立の歴史と言ってよい。近代形而上学は，ratio が「根拠（Grund）」と「理性（Vernunft）」としてその全本質を展開することによって初めて，完成する。

ratio についてのハイデガーの解説を詳細にたどることにしよう。このことは，彼の西洋形而上学に対する理解の根幹を明確にするうえで極めて役に立つと思われる。ここでは，「すべての根本命題中の根本命題そのものである」「根拠の命題（der Satz vom Grund＝根拠律）」を，自覚的に定立したとされるライプニッツのその表現．即ち《Nihil est sine ratione》に関してなされたハイデガーの論究を見て行くことにする。[1)]

この論究に際してハイデガーは，根拠の命題を，単に「存在についての命題」としてではなく，「存在としての存在，即ち，根拠としての存在，かかる存在の内への跳躍」[2)]として理解するよう求める。その跳躍は，この命題を《*Nihil* est *sine* ratione》：「いかなるものも根拠無しに有るのではない」から，その音調を《Nihil *est* sine *ratione*》：「いかなるものも根拠無しに有るのではない」に転じて聴くことによって可能となる。[3)] このこ

とによって，根拠の命題は「存在の＜存在者のではなく＞命題」としての位置付けを獲得する。ここからハイデガーは，「存在と根拠の共属性（Zusammengehörigkeit）」を考察し，1. 存在と根拠：同一（Sein und Grund: das Selbe）と，2. 存在：脱－根拠（Sein: der Ab-grund）の二つの呼び掛けを聞き取るのである。存在が根拠の本質から，存在者を根拠付けつつ存在させるものであるとすれば，「存在は，存在を根拠付けるべき更にもう一つの根拠を，決して持ち得ない。従って，根拠は存在から離れ去って」，「抜け去っている」。この意味で「存在それ自身は無根拠に留まる」。[5]

かかる考察によって追求される事柄は，「存在の本質を観取すること」[6]であり，その本質を，存在がそれ自身を根拠として贈り渡すことによって，「存在としてそれ自身を脱去させる（entziehen）」ということから思考するということである。そしてその思考は，ライプニッツによる「根拠の命題」の自覚的定立と共に，「存在の脱去」は「近代」のエポック（Epoche）に入って，「存在としての存在の一層決定的な脱去の内へと後転する」[7]という事態の省察になる。この省察の経路に，存在と根拠の「存在の運命」における関係を際立たせる言葉として，《ratio》は立っている。

II

「ratio は reor（と思う，と考える）に由来し，その主導的意味は，或るものを或るものとして見做すということであり，その際，後者の或るもの，すなわちそのものとして前者の或るものが見做されるところのものは，下に置かれ（unterstellen）ており，つまり予め定立され＜＝前提され，想定され＞（supponieren）ている。このような下に置くことに際しては，その下に或るものが置かれるところのものは，下に置かれたもの＜前提＞に差し向けられている（zurichten auf）。このことが，即ち，或るものを或るものへと適合させる（etwas nach etwas richten）ということが，ドイツ語の動詞《rechnen》の意味である。或るものを計算に入れる＜算入する＞（mit etwas rechnen）とは，そのものを眼中に保持し，そのものへと自己を適合させることを意味している。或るものを当てにして計算する（auf etwas rechnen）＜頼りにする＞とは，そのもを期待し，その際そのものを頼るべきものとして正しく整える（zurechtrichten）ことを，意味している。」[8]

「Kalkulation（算定する）とは，一つのものと他のものとを比較しつつ見積もりつつ向き合わせ対照することである。それ故，数による演算という意味での計算は，量の本質によって表記される特殊な種類の計算である。或るものを計算に入れ或るものを当てにして計算するということにおいては，そのように計算されたもの（das also Be-rechnete）が，表象作用（Vorstellen）にとって前面へと，即ち明白なものへと齎らされる。」[9]

計算においては，算入されたものと当てにされたものとが「表象される」が，それはそれらが，「或る事柄に関して，如何なる事態になっているかということと，その事柄においてその事柄を規定しているものが何であるかということ，その＜二つの＞ことについて

の理由（Rechenschaft＝釈明）を与える」[10]という仕方で表象されるのである。この「理由」の内に，「或る一つの事柄が現に有るように有るということと，何に拠ってそうなのかということ」[11]があからさまになる。従って，計算には二つの意味がある。即ち「計算するという働き」と「この計算の働きにおいて得られたもの，即ち算出されたもの（das Gerechnete），提示された見積もり（Rechnung），理由」の二つである。

このように，計算することは，表象することとして，常に「理由を釈明する（eine Rechenschaft ablegen）」ことに他ならない。このことはラテン語で《rationem reddere（根拠を返し与える）》と言われる。そして，この「reddere（返し与えること）は，計算としての ratio の本質のうちに予め形成されて（vorbilden）おり，予め要求されている（vorlangen）」（傍点筆者）[12]ものである。

ハイデガーは，本質的に帰属し合う「《rationem reddere》の種類と意味の変動」と「根拠の，即ち，ratio，計算，理由といったその都度の運命的刻印」が，「一つの運命としてそれ自身を開明する」存在の「近代的エポック」に到達した形態から，存在の本質を顧みながら次のように省察するのである。「ライプニッツにおいては，reddere は表象する自我（das vorstellende Ich）に関係づけられており，且つ，表象する自我によって遂行されており，その自我はそれ自身にとって知られている＜確実な＞主観（Subjekt＝主体）として規定されている」。[13] ライプニッツの思考において存在は，reddendum の内に近代という運命的な「呼び求め性格（Anspruchscharakter）」を顕にする。即ち，ratio は，ライプニッツの思考において principium（原理）になることによって，「すべての存在者にとってその存在に関して基準を決定し支配する呼び求め（＝要求）」となり，「その呼び求めは，存在するところのすべての事物を，存在するものとして算定する（errechnen）或る一つの検算（Durchrechnung＝汎通計算）の，その可能性のための理由を与えることを要求するようになるのである。[14]

このことを省察した後，ハイデガーは次のように記している。

「ニーチェの語るごとく神が死んだとき時，計算された世界は尚も留まり，その世界は，一切を根拠の原理（principium rationis）に基づいて勘定することによって，人間を至る所でこの世界の計算の内へと据えるということ，このことを見るために必要なことは唯，我々の原子時代の内へと見入る覚悟のこもれる眼差しのみである」。[15]

Ⅲ

これまで見てきたごとく，「計算」にとって本質的な点は，計算には「算入されるもの」と「当てにされるもの」の二つの要素が帰属しており，そしてこの二つ要素が，有るものがそのように有ることの「理由」を与えるということであり，しかも計算という働きそのものにおいて，計算する者にこの「理由を与えること」が要求されている，ということである。

計算において，計算する者は先ず第一に，算入するものを明確に眼差しの内に補足し，第二に，眼差しの内に補足しているものを差し向けて，その「何であるか」を確実に規定し証明するために十分な（当てにする）事柄を自らに提示しなければならない。この二つのことが成し遂げられたとき，計算する者は，彼が関わっている対象と彼自身，及び彼と対象との関係において，それらの存在に関して彼自身にとって十分な理由が明け渡されるのである。このような「理由」は，もし「計算」がその本質に適合して遂行されているならば，計算する者の恒常的な状態に偶々付け加わった単なる一表象に留まることはありえない。まさにこの「理由」によって，計算する者は初めてその存在の基盤（理由）＝根拠を獲得するのである。この点に「計算」: ratio の「近代」における形而上学的意味がある。近代における人間の本質－自ら根拠を与えつつ（Begründen）根拠を獲得する（Ergründen）ように呼び求めれている[16]—その本質とは何であるのか。

我々はその本質を究明するために，ハイデガーの思考に沿いながら，上記の計算の個々の要素を逐一検討しなければならない。即ち，「算入されるもの」，「当てにされるもの」，「理由を与えること」及びそのことが「要求されていること」，そして何よりも先ず，計算が人間の思考の標準となったという事実そのもの，これらが検討にかけられなければならない。このような検討は，一方で，ハイデガーの言う存在の運命の一エポックに位置付けられる「根拠の命題」の意味付けに呼応するであろうし，しかし同時に他方で，人間本質の極限的刻印（詩人）－西洋的なものと東洋的なものとの対話を可能にする—にも通じるであろうことを期待している。

第一の観点において，「思考と認識との最上位の根本命題として根拠の命題がその要求を強めている」ということ，この要求がその時「初めて展開して大きな勢力となる」と共に，「存在が存在としてはその都度益々決定的にそれ自身を脱去させる」ということ，そしてまた，「存在するものの存在の或る新しい解釈が展開されてくる」ということが，示されよう[17]。この最後の事態は，「存在が，意識に対する対象性（Gegenständigkeit＝対立性）として自己を開示すること」と同時に，「存在が，それ自身を意志（Wille）として前面にもたらすこと」を謂う。[19]

第二の観点において，人間の「詩人的」本質の解明への道筋が示されよう。

Ⅳ

先ず，計算において「算入さるもの」と「当てにされるもの」について考察しよう。この二つの要素は決して分離して論じることはできない。何故なら，「算入されるもの」は，それが眼差しに補足されるのは，必然的に「当てにされるもの」の光の下においてのみであるからである。

その最も始原的な事例を，プラトンにおける「個々の存在する事物」とイデア（ἰδέα）との関係に見ることができる。この場合，両方とも一つの存在するもの（ὄν）ではある

が，存在の光を自ら備えているイデアのみが，存在するものとしての存在するもの＝真なる存在者（ὀντως ὄν）であり，イデアの中に自らの現存性と存続を，即ち，存在を有しながら，ただ特定の仕方で，しかも制限され損なわれた姿でイデアを現象せしめるすべての特殊な「個々の存在する事物」は，非存在者（μή ὄν），「本来そうあるべきではない仕方で存在するもの，全面的に存在者として表示することをまさに拒まれざるをえないところの存在者」[20]である。

プラトンに始まるこのイデアと特殊な個物との間の存在構造は，爾来様々な姿をとって西洋形而上学の潮流を規定し続けることになる。ハイデガーはこの規定力の発動を，その端緒から西洋近代科学の成立とニーチェの「力への意志の形而上学」の展開に至るまで，「存在の歴史」として詳細に跡付ける。それは具体的にはキリスト教との連携のなかで，自然・人間・神という「存在するもの全体」の存在の解釈として映出してくる。その際，それぞれの解釈が，自然学（宇宙論）・心理学・神学という分岐した「特殊形而上学（metaphysica specialis）」の形をとるにせよ，存在論という「一般形而上学（metaphysica generalis）」の形をとるにせよ，或いは，近代科学における数学的本質の際立った前景化や，演算の理論・方法の飛躍的進展を伴う近代数学の形をとるにせよ，すべての解釈はあのプラトンに始まる存在構造に根付いていると，見做されるのである。では，かくも「強力な」この存在構造の本質とは何であろうか。

既に見てきたごとく，プラトンは，イデアと現実の個物との間に一つのコーリスモス（χωρισμός）を設けた。[21]だが，まさしくプラトンの思考に即して言えば，かかるものを設ける前に既に予めプラトンはなんらかの仕方でコーリスモスを経験し，知っていたはずである。このコーリスモスとイデア及び現実の個物の経験は，同一の存在経験に属するものである。むしろ，プラトンのコーリスモスの本質的にして根源的な経験こそが，イデアの思想を彼において必然的ならしめたのである。彼以降，形而上学として西洋人の思考を根底から一つの逼迫状況において揺り動かし続けて来たものは，この本質的・根源的コーリスモスに他ならない。それこそ西洋人の胸深く刻み込まれた－それを埋めるべく強いられている－亀裂＝隙間である。「見る」ことにおいて先行的に支配しているべきイデアの明視性は，まさにこのコーリスモス＝亀裂の領域において，否，この領域においてのみ，その本質的能力を発揮し得るのである。

「存在をイデア及び善（ἀγαθόν）とするプラトンの解釈にその歩みを発し，最後に，力への意志（der Wille zur Macht），即ち，存在とは価値を設定し一切を価値として思考する力への意志である，とする存在解釈に至る」[22]形而上学の歴史は，その歴史の内に働いている根源的緊張としてのコーリスモスの変容と見做すことができる。ハイデガーの用語に関係づけて言えば，コーリスモスとは「存在の脱去」のプラトン的経験である。しかし，ここでの検討においては，プラトン的経験領域を強調するために，敢えてコーリスモスの用語を使うことにする。「計算」はこのコーリスモスの内部における「思考」で

ある。因みに，後述する「省察」は，形而上学から出発する限りは，コーリスモスをコーリスモスとして思考するものである。

V

コーリスモスを内に孕む存在構造においてのみ，またコーリスモスとして開かれた領域でのみ「計算」というものが可能であり，且つまた，必要となる。何のために？ 存在するものが，在るがままに存在するために。では，そこには何が存在するのか？ 他ならない，イデアと現実の個物が存在し，そしてやがては，計算において理由が返し与えられるべき「自我」の存在が前面に押し出てくる。

プラトンの用語法に従えば，計算において「算入されるもの」は現実の個物であり，計算において「当てにされるもの」はイデアである。そして，計算において「理由が与えられる」ところの，その「与える」ということを「要求しているもの」はコーリスモスである。

ハイデガーが挙げる「計算的思考」の二つの典型的な事例について言えば，一つはカントの「経験」思想であり，他の一つはニーチェの「価値」思想である。カントの用語法に従えば，「算入されるもの」は「経験一般」及び「経験の対象」であり，「当てにされるもの」は「範疇（Kategorien）」乃至は「純粋理性」，或いは「先験的自我」乃至は「先験的統覚」である。ニーチェの用語法に従えば，「算入されるもの」は「価値」であり，「当てにされるもの」は「力への意志」である。しかし，そのいずれにおいてもそこで「理由を与える」ことを「要求しているもの」は，その「理由」がそれぞれ「可能性の条件」と呼ばれようと「目標」と呼ばれようと，やはりその本質は，プラトンにおけるコーリスモスと同一のものなのである。

煩瑣な記述を避けるなら，「計算」とは「コーリスモス」である，と言ってよい。上記の計算における諸要素の「本質（Wesen）」は，コーリスモスの本質に一致する。ハイデガー流の表現をすれば，コーリスモスは計算として現成する（wesen：動詞的）。従って，計算の本質についての検討は，コーリスモスの本質についての，或いは，コーリスモスにおける存在するものの存在についての検討に帰着する。それ故，ここでは差当り，コーリスモスにおける存在するものの存在様式を特徴づけることにしたい。

上述のごとく，プラトンのイデアの思想において，コーリスモスの領域に存在するものは，イデアと現実の個物の二種類である。この「二種類」という表現は，ハイデガーの区別づけでは，存在と存在者の「二重性」となる。そして，プラトンは，同じコーリスモスに帰属しながらこの二種類のものにそれぞれ別々の場所（ἡ χώρα：コーラ）を割り当てたとハイデガーは見做すのである。[23] そのため，「コーリスモスの生命とも言える二重性は，存在者的関係によって覆い隠され」[24]，二種類のものの「統一原理であるところの》一者《」の本質において，即ち存在者と存在の差異そのものの視向の中で思考されるこ

とがない。しかし，コーリスモスの「本質＝非－本質」がまさにこの点にある事も，ハイデガーは観ている。コーリスモスはコーラ＝裂目に由来し，根源的には裂かれ空け開かれていること＝(根源的意味での「場所」) を謂う。従って，それはそこに入ってくるものを締め出し，排除するという基本的な性向を有する。この性向故に，コーリスモスはそこに帰属する要素（イデアと現実のもの）を，それぞれをそこから排除しつつそれぞれの「場所」へと割り当て，それ自体としては自らの内へと身を退く（sich entzihen）のである。そのため，それは，そこに帰属する二種類の要素の本来の「唯一の統一原理」という本質においては，（イデアや現実のものを思考するようには）思考されないのである。

VI

この思考されない「裂目（Riß)」の体験と共に，西洋の哲学は始まる。根源的な調和（ἁρμονία）にあった「愛する（φιλεῖν)」=「ロゴスに応答する（ὁμολογέιν)」と「一にして全（Ἕν Πάντα)」を「知ること（τὸ σοφόν)」，即ち，「一切の存在者は存在において存在する（Alles Seiende ist im Sein.)」＝「存在は存在者である (Das Sein *ist* das Seiende.) ＜である (*ist*) は他動詞的で「集約する（versammeln)」[25] の意味を持つ＞」が，ギリシア人に「驚異」を与えていた状態，かかる状態が失われて行くことによって，この「裂目」は口を開いたのだった。

この「裂目」は二種類の人間をギリシアにおいて生み出した。一方で「ソフィスト」を，もう一方で「哲学者」を。ソフィストは「健全悟性（常識)」を盾にして「誰にでも理解できる説明」によって，「驚異」と「調和」の喪失した「空隙＝裂目」に漂う不気味な不安を解消せんとした。逆に，哲学者たちは，この不安の中に尚も痕跡を残す根源的な「調和」の「驚異性」を，「ソフィストの悟性の攻撃に対抗して」救出せんとした。それは「エロース（ἔρως）によって規定された」，「ソフォンへの特殊な努力」＝φιροσοφία（哲学）となる。[26]

「ソフォンへの，ヘン・パンタへの，存在における存在者へのこの努力する探究が，いまや，存在者はそれが存在するかぎりにおいて何であるかという問いになる。思考が今や初めて『哲学』となる」[27]

しかし，ソフィストにしろ，哲学にしろ，結局は同じように，あの「裂目」の本質にまで思考を透徹して行くことなかった。従って，調和と驚異をもたらすあのヘン・パンタ，即ち，存在の本質を，それとして思考することはできなかったのである。ソフィストにあっては，「裂目」の打ち開かれた「上空」は，「低地」の出来事と関心事へと引き堕ろされ，哲学者にあっては，上空と低地はその調和的な一なるものの二様性としては保護されず，「裂目」の持つ本質性向に抗し得ず，それぞれに割り当てられた場所（＝コーラ）にひたすら帰属するものとして，相互にその独自性を主張する対抗の中に置かれることとなった。こうした対抗は，「現世」にあっては完全には融合されることなき関係として，コーリス

モスの絶対的な排斥力の支配下に置かれている。同じく，「上空」を忘却した「低地」もまた，この排斥力の一方の側面の支配に屈しているのである。その支配下において，一方が，尚も「超感性的」な「仰視」を志向するのに対して，他方が，「感性的」な拘束を認識の本質契機と思いなす，という違いはある。

いづれにせよ，かかる支配下にあって，初めて，「～とは何であるか」という問いが発せられる。この「問い」は，支配力を揮いながらその本質を脱去せしめた（それとして思考されることなき）コーリスモスの出来事である。この故にこそ，「理由を与える」ことを要求することを強いる「問い」であり，そして，その「答え」が「計算」という出来事である。しかし，ここで重視されねばならぬことは，この「問い」は尚も，脱去しているコーリスモスの本質の気配を伝えているが，その「答え」になると，かかる気配さえ覆い隠してしまうのである。本来，「計算」には「問い」の本質的契機が失われているか，失われることが要求されている。これは，「理由」を求めることの内に含まれている本質傾向である。

Ⅶ

「計算」は「～とは何であるか」という「問い」に由来し，この「問い」は本質の脱去したコーリスモスに由来し，後者は存在（一にして全）と思考の根源的な「調和」と「驚異」の喪失に由来する。この喪失は，しかし，「運命」として西洋人が否応なく引き受けねばならなかったところの「謎（Rätsel)」乃至は「秘密（Geheimnis)」である，というのが，ハイデガーの思考の原点である。この原点において，「思考」と「詩作」の対話が究明される。このような原点に立つハイデガーにとっては「計算的思考」は，それら一切に無頓着な（sorglos)，存在脱去の最も進んだ思考法に他ならない。

「～とは何であるか」という問いは，プラトンに即して言えば，「現実の個物」を「イデア」への見通し（仰視）の中に置くことである。因みに，「問う」ことは，その本質において，決して意のままになる探究なのではない。「問う」ことの深さと重みは，問う者の背後にまで達する存在の深みと重みをそのまま映しだしたものである。この点に，問うことの「切実さ」の正体がある。或るものを別なものへの見通しの中に置くこと自体は，問うことの「形式」に他ならない。そして，問いにおける「何」が「実質」的に「問い求められているもの」であり，しかし，それはプラトン自身を包み込んでいるコーリスモス，存在の脱去した裂目そのものの鳴響であると言ってよい。

もしそうであるなら，「～とは何であるか」という「問い」に対して，なんらかの答えが提出されるとしても，それは決して十分な「答え」にはなり得ない。何故なら，この問いには，本質的に統一できない三つの契機（イデア：現実の個物：コーリスモス）が含まれており，その契機が「形式」上統一されたものが「問い」という構造を持つに過ぎないからである。「～とは何であるか」という「問い」は，それがもし真実の「問い」である

なら，もはや決して「答え」を求めたりしないものであり，それがもし真実の「答え」を提示し得るなら，その「答え」は既にこの「問い」の中に現われていたものである。

「～とは何であるか」という「問い」を構成する三つの必須契機，「現実の個物」を「イデア」への見通しの中に置くこと，それは既に「答え」であり，「何」を鳴り響かせるコーリスモス，それは答え無き「カオス（χάos）」である。

それ故に，すべての真実の問いは，単に「切実」であるばかりでなく，問う者を深淵にまで達する「混迷」へと引き込むものなのである。それは，一つの答えに縛り付けつつ，カオスの遊動空間へと引き浚う。このようにして問い続けるにせよ，最早問わないにしろ，人間は「答え」に固執する限り，一つの答えに逢着した途端に新しい「問い」への脅迫に身を晒すことになる。かくして，人間は，答えを求めて問うことに熱心であればあるほど，問い空間の分裂的本質とカオスの引き浚う威力を，より深くより高く経験せざるをえない。この問うことの内に生じる際限の無い不安を逃れるために，一種の「擬態」としての「問い」，即ち，「計算」が始まる。「計算」とは，存在の脱去したコーリスモスの更なる隠蔽である。この隠蔽と共に，問いの前景に「イデア」と「現実の個物」が進出し，やがてそれだけが「問い」の本質契機と見做されるに至る。こうして「問い」はすべて，存在者としての存在者を規定するためだけのもの，「存在者は存在するかぎりにおいて何であるか」に還元される。それが「哲学」の探究するものとされ，存在は存在者性（Seiendheit）から見通される。

Ⅷ

「計算（非本質的問い））」においては，「現実の個物」が「イデア」への見通しの中に置かれる，ということだけが行なわれる。それと共に，コーリスモスそのものが問う者を「何」へと浮動させることなく，むしろ，問う者を定着させ滞留させるべき地盤が，「理由」や「根拠」として求められるようになる。「問い」は一つの「要求」となる。非本質的問い（＝計算）の特徴は，そこに発動しているこの「要求」の本来の意味が，問う者（＝要求する者）自身には隠される，という点にある。何故なら，その「要求」は，二重に隠蔽されたあのコーリスモスの深淵（無根拠性）に源を発しており，しかも，まさにこの源をこそ絶滅せんとする（結局は徒労に終わる自己反逆の）努力に他ならないからである。「計算」におけるこの基本構造と基本性格は，最広義におけるいかなる計算においても妥当する。

先に見たように，西洋形而上学において「計算」を意味する＜ratio＞は＜reor：或るもの（A）を或るもの（B）と見做す＞に由来する。その言表形式は，「AはBである」である。「～（A）とは（Bを見通して）何であるか」は，問いの形態としては，AがBに差し向けられる理由，それ根拠にしてAがBに適合するところの或るものを探求している。「計算」において「算入されているもの」がAであり，「頼りにされているもの」が

Bであり，「要求されているもの」がAがBに対して適合する理由：根拠である。この「計算」の三契機は，「現実の個物」と「イデア」の「関係」にどのように対応するであろうか。この対応は，それぞれの存立契機を完全に満たしているであろうか。また，その対応において，「事物」はいかなるものとして人間に提示されるであろうか。

「AはBである（AをBとして見做す）」と「言う」ことの意義は，上述のごとく，「AがBに適合して存在する」こと，及びそのように「存在することの理由」が「言う者」に提示され，確保される点にある。計算の順序についての一般的理解からすれば，計算においては，先ずAが眼差しの内に「保持」され，次いで，Aがそれとして見做されるべきBが「提示」され，最後に，AのBに対する適合の理由が「確保」される，ということになる。計算におけるこのような「順序」は，だが，実は錯覚にすぎない。この錯覚に過ぎない「順序」が，計算をして「（本質的）問い」を問うているという錯覚に至らしめる。

「順序」が錯覚であるというのは，上記の「保持」・「提示」・「確保」が一つの時間的経過の中に置かれるとしても，その「時間」そのものが，言わば「作為的」なものに過ぎないということに基づいている。計算の本質には，「時間の（作為的）設定」もまた含まれる。あの「保持」・「提示」・「確保」の計算における三契機は，本来「同時」のものである。Aが眼差しに保持されるためには，必ず，Bが予め何らかの仕方で提示されていなければならない。AはBの光の下で初めて，それとしての「見え方」を見る者に与えることができるのである。そしてまた，その「見え方」の中に既に，Aがそのように存在する「理由」が「確保」されているのである。計算においては，一切が同時に存在している。

「現実の個物」と「イデア」の関係が，本来の「存在」の関係性を薄弱にして行く過程で，「見る」ことに即した関係性が表に出て来るようになる。存在の統一性の本質が失われ，「見る」ことの分裂した二重性が，その本質が思考されないまま，「束の間」と「永遠」とに振り分けられた時間の位相において支配することになる。この「見る」ことの二重性と，「束の間」＝瞬間と「永遠」＝持続の分裂した時間の位相の中で，計算の可能性とその錯覚された意義づけが生じてくる。

しかし，計算における錯覚の必然性は，「現実の個物」の存在を「イデア」が可能にするというプラトンの思考に始まっているのである。「現実の個物」が本来メー・オンであるとすれば，それの存在を可能にする「イデア」が標榜するオントース・オンは果たして真実の存在といえるであろうか。条件付きでそれは真実の存在である。即ち，「現実の個物」への対立関係において。その存在において「イデア」は「現実の個物」に依存している，という奇妙な関係がここにはある。

計算は，その意に反して，かかる奇妙な関係の中に陥る。何故なのか。計算は，確固とした根拠を持ちたいという深刻な要求の内にありながら，却って，存在するものを二義的に（zweideutig：曖昧に）見るように自分自身を強いるのである。かかる二義性の典型が「現実の個物」と「イデア」に他ならない。計算する思考は，個物をイデアによって見，

イデアを個物によって確認しなければならない。計算の目は既に乱視の状態にある。それ故にこそ，確実な地盤を求めざるを得ないのである。かかる逼迫の本質を，計算は思考し得ない。それをするのが「省察的思考」である。（四）完

註

1) M. Heidegger; Der Satz vom Grund, Neske, 2Aufl. 1956. s. 45
2) ibid. s. 96
3) ibid. s. 75
4) ibid. s. 93
5) ibid. s. 93
6) ibid. s. 101
7) ibid. s. 100
8) ibid. s. 167/8
9) ibid. s. 168
10) ibid. s. 168
11) ibid. s. 168
12) ibid. s. 168
13) ibid. s. 169
14) ibid. s. 169
15) ibid. s. 170
16) M. Heidegger; Identität und Differenz, Neske, 4Aufl. 1957, s. 60/1
17) Der Satz vom Grund, s. 114/5
18) 同じく「対象性」と訳すが，＜Gegenständigkeit＞ の方は，主体に対して対立していることを意味するのに対して，＜Gegenständlichkeit＞ の方は，対象の可能性を意味する。
19) Der Satz vom Grund, s. 119
20) M. Heidegger; Nietzsche II, Neske, 2Aufl. 1961, s. 218
21) 『岡山理科大学紀要B』第25号，「科学と詩作」（三）参照
22) Nietzsche II, s. 222
23) 前掲書.「科学と詩作」（三），Ⅳ 参照
24) 前掲書.「科学と詩作」（三），73頁
25) M. Heidegger; Was ist das - die Philosophie?, Neske, 4Aufl. 1966, s. 14
26) ibid. s. 14
27) ibid. s. 14/5

Wissenschaft und Dichtung (Nr. IV)

——Zur Quelle des Urteils——

Satosi NAKASIMA* und Teruo KURISU**

*Abteilung der Allgemeinen Bildung von der Naturwissenschaftlichen Universität Okayama
1-1 Ridaicho, Okayama 700 Japan
**Aushilfsdozent von der Naturwissenschaftlichen Universität Okayama

(Am 30. September 1990 empfangen)

Das rechnende Denken,das in der abenländischen Metaphysik seit dem Platon waltet, prägt die wesenhaften Funktionen in dem lateinischen Wort 〈ratio〉 aus. Ratio gehört zum Zeitwort 〈reor〉, dessen leitender Sinn ist: etwas für etwas halten. Dieser Sinn geht zum Platons Denken zurück, zu dem ἰδέα, αἰσθητόν und χωρισμός gehören. Das χωρισμός ist der Riß (Entzug des Seins als solches), der sich zwischen dem Sein (ἰδέα) und dem Seienden (αἰσθητόν) eröffnet. Platon, der sich in das χάος des Risses von Ἕν Πάντα fort setzt, fragt, was das Seiende ist, insofern es ist. Was hier gefragt ist, kommt vom χάος des χωρισμός aus. Die Antwort auf diese Fragen besteht in ἰδέα und αἰσθητόν, denen beiden der Entzug (χωρισμός) selbst sich entzieht. Alle Rechnung, die solche Struktur hat, ist sozusagen das Unwesen des Fragens.